

コロンビア地震・救援委員会

災害発生: 1999.1.25 コロンビア中西部(M6.0)

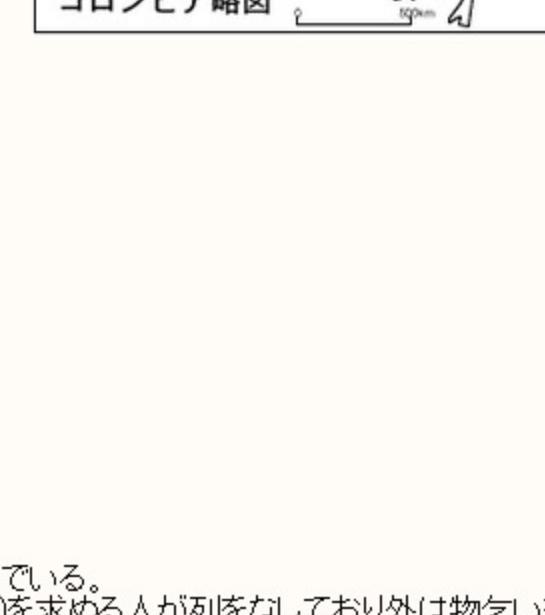
救援開始: 1999.1.26~12.31

1999年1月25日の地震発生後、様々な方面から情報が集められ、その結果上智大学のグスタボ・アンドラー・デ氏を仲介役として現地のNGO団体“SER VIVIENDA”を通じて現地の支援活動を行うことになった。神戸を中心に呼びかけ、集められた募金は現地で建設計画のある「ケアセンター」建設とそこで行われるケアープラットの費用として使われることとなった。現在建設候補地を被災が大きかったアルメニア市内に探し

ている。

また、7月28より、鷹取教会の神田裕徳牧師がグスタボ・アンドラー・デ氏と共に被災地に入り、現在の状況と今後の予定を確認などの調整を行った。

救援募金総額: ¥8,961,272(428口)

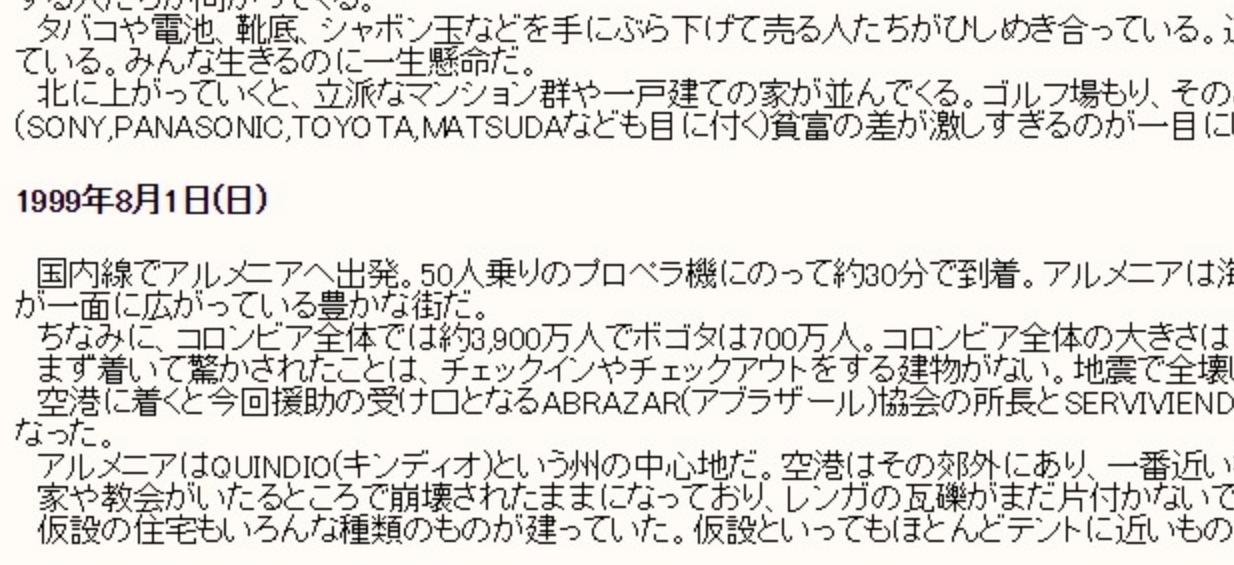


■南米コロンビア地震救援活動現地訪問レポート

1999年7月29日(木)

7/28 午後9時半(日本時間7/29 午前11時半)、コロンビアのサンタ・フェ・デ・ボガに無事到着。ここは海拔2,640メートル。気温はとても涼しくセーターが必要。

マイアミからボガへのチェックインでは次の約束にチェックをしてサインをしなければならなかった。知らない人から頼まれても物を運びませんか? 麻薬やコカインを使用しませんか?などだった。ボガまで行く日本人は私一人だけみたいだった。ボガでの荷物はノーチェックです。



1999年7月30日(金)

雨。寒い。長袖を2枚着ているがまだ寒い。コロンビアの人がよく着ているポンチョを借りた。とてもいい。ボガは人口700万人。周りを山に囲まれた盆地だ。平地でも2,400メートルはあり周辺の山々は3,000メートルを越えている。南は旧ボガの中心街で大統領の官邸や裁判所などがあるが、周辺はスラムが広がっている。煉瓦造りの壊れそうな家が軒並み並んでいる。コロンビアは人口の約5%ほどがアフリカ系。教会が歩ける距離でたくさんあった。教会の中は聖水(飲めば病気が治ると信じているらしい)を求める人が列をなしており外は物乞いをする人たちが向かってくる。夕方電池、靴底、シャボン玉などを手にぶら下げて売る人たちがひしめき合っている。道行く人の写真を勝手に撮って無理やり売りつけているおじさんもいた。活気がみなぎっている。みんな生きるので一生懸命だ。北に住んでいくと、立派なマンション群や一戸建ての家が並んでくる。ゴルフ場もあり、そのあたりは日本人が多いらしい。多分商社などの出張の人たちだろう。(SONY,PANASONIC,TOYOTA,MATSUDAなども目に付く)貧富の差が激しきるのが一目にして分かる。

1999年8月1日(土)

国内線でアルメニアへ出発。50人乗りのプロペラ機にのって約30分で到着。アルメニアは海拔約1,400メートル。Tシャツですむ。ここは人口45万人の街だ。コーヒーとバナナの畑が一面に広がっている豊かな街だ。

南は旧ボガの中心街で大統領の官邸や裁判所などがあるが、周辺はスラムが広がっている。煉瓦造りの壊れそうな家が軒並み並んでいる。

コロンビアは人口の約5%ほどがアフリカ系。教会が歩ける距離でたくさんあった。教会の中は聖水(飲めば病気が治ると信じているらしい)を求める人が列をなしており外は物乞いをする人たちが向かってくる。

夕方電池、靴底、シャボン玉などを手にぶら下げて売る人たちがひしめき合っている。道行く人の写真を勝手に撮って無理やり売りつけているおじさんもいた。

空港に着くと今回援助の受け口となるABRAZAR(アブラザール)協会の所長とSERVIVIENDA(セルビビエンダ)の代表が迎えに来てくれており車でアルメニアを案内してくれることになった。

アルメニアは人口700万人。周辺はその郊外にあり、一番近い被災地のテバイダ(村)にまず入った。

家や教会が倒れたところで崩壊されたままになっており、レンガの瓦礫がまだ片付いていない。

仮設の住宅もいろんな種類のものが建っていた。仮設といってもほとんどテントに近くものだった。仮設によって種類が違うのはスポンサーの違いによる。

アルメニア近辺仮設 8月2日(月)

仮設住宅(もと住居場所かその近辺の指定されたところに建てられている)。

各国のスポンサーがそれぞれ適切に割り当てられて、それぞの地域の仮設を建設する。自分たちで建てているものもある。

元住んでいたところには何らかの事情で帰ることができず、自分たちで勝手に違法な場所に建てている人たちもいる。これらは、そのうち追い出されるか、スラム化してしまうことになる。

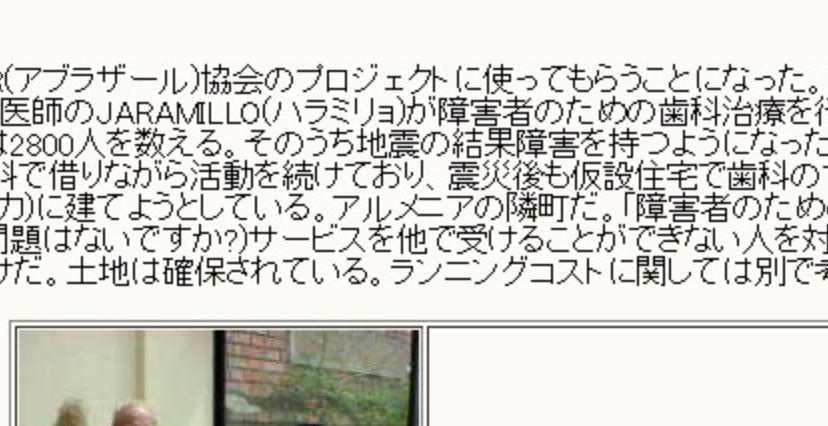
中は共同の台所や洗濯場があり、結構、きちんと共同生活をしているみたいだった。



アルメニア近辺 教会 8月2日(月)

アルメニアの地震は1月の終わり。(ほとんどが)煉瓦造りなので火事(はなかった)。教会(はこの地震で活動をしていない)。カトリックの国(南米なんかは(ほとんど)で)災害があった時、NGOが窓口としてまず教会を探しているが(しかし)教会(は何もしない)か、教会に来ている人だけに送った物資を配っているとかよく噂を耳にする。事情(貧しさの度合いなど)が違うのかもしれないが、教会ルートでお金や物資を送っても何にも役立たないことがよく分かった。教会の会計にそのまま入ってしまいそうだ。

近づく教会でミサをした(ボガ)。150人くらいの小さな教会で、通訳つきで説教もした。神戸の地震のこと、そして神戸のみんなの心がアルメニアへつながることなどを話した。ミサが終わる、祭壇から去ろうとしたとき、4歳くらいの小さな男の子がふたり走りよってきて服をつかみ「ありがとうございます」といってくれた。



1999年8月2日(月)

テバイダ村の中の競技場で一週間、住宅の建設説明会が催されていた。建物を建設するNGOや企業などがそれぞれ軒を並べていた。地震で被害をこうむった被災家族は一家につき、800万ペソ(約80万円)の義援金が支給される。家の崩壊したという証明が必要だが、その証明は政府に認められているNGOなどしかしていない。

この住宅説明会では、それぞれが住宅の模型を並べ好みに合ったものを被災者が選ぶようになっている。

地震後の工夫として、レンガの下敷きになって亡くなったり怪我をした人が多かったので、レンガを避けバネルのようなものをはめ込んで作ったりしている。屋根も瓦で重かったので軽いものになっている。

一軒当たり800万ペソから900万ペソで、何とか義援金で建てることができそうだ。

今回のアルメニアの地震の被害は全体で約90万人(約7万世帯)。そのうち家がなくなってしまった数は1万6千世帯だ。

エルサレム 8月3日(火)

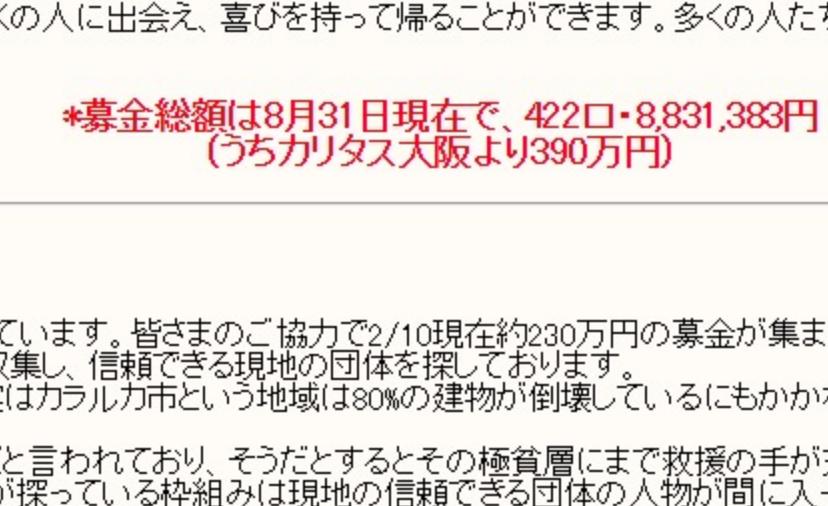
ボガは南に行くほど貧くなる。

南端のエルサレムにあるセルビビエンダの事務所では、家作りの支援と建築材料を提供するプロジェクトが組まれ、部品ごとに安く提供している。住民はアンケートに記入し、無利子で毎月400円ずつ支払う。本来、セルビビエンダはインフラ整備をしていた。特に水不足。タンクはそのためのものである。

エルサレムはいわゆるスラム街で、土地所有の証明がない(も6年たてば居住権が発生する)為、勝手に家を建てている。この街にはゲリラが怖くて田舎から出てくる人が多い。

家はレンガでなく木のドクタノンを貼り付けただけの貧しいものだ。セルビビエンダはこのように何らかのかたちで形じょうどころを支援の対象にしている。土地だけあって何も建てていなければ支援の対象にはならないそうだ。

訪問した家は、4畳半ほどの台所にベッドがあり、病気のおばあさんと子どもたち3人と今は働きに出ているお母さんの5人家族で住んでいる。このように父親のいない母子家庭が多い。子供たちは母親を助けるために、街の路上で果物など売り歩くことになる。



エルサレム 8月3日(火)

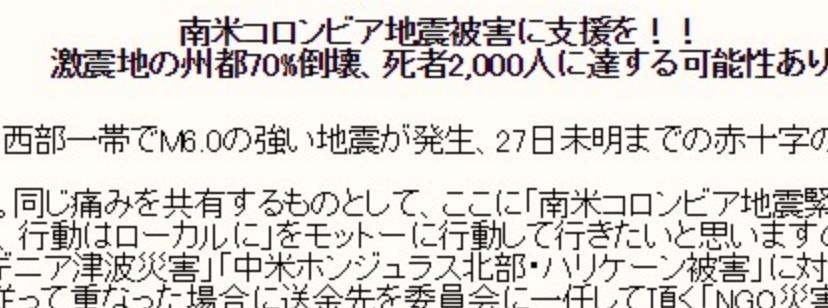
SERVIVIENDAとは、SER(サービス・人間)+VIVIENDA(家族)。安い建物を提供し、コミュニティを形成することを目的としたNGOである。1974年に創設してから、家や学校や教会を8万件も提供してきた。

一軒、およそ数十万円でできてしまう。まず交話をして家を建てるなどを立て、毎月支払う分が記入されたチケットをもら、無利子で数年間支払いをする。

超安価であるため顧客層が重ならず。建築業界とトラブルは起らぬ。SERVIVIENDAは社会的に認められている。

セルビビエンダの前身は現在もチリにあるオガルデ・クリストというNGOだ。1852年にカトリックのイエスス会の宣教師が始めたらしい。コロンビアの他にニカラグア、ホンジュラス、エクアドル、ペルー、トニーの6ヵ国で活動している。

コロンビアには4つの事務所がある。この本部では60人が有給で働いている。コロンビア全体では180人のスタッフが働いている。自分たちの工場や倉庫を持っており、建築材料をすべて自分で作っている。企業とはやり方や目的が違う。「自分たちの利益のためにやってない」、「その人に合ったものを提供する」といったところか。自分の夢と人生をかけた仕事を関わる。これがNGOなんだなどあらためて思った。空いた時間にちょっとするボランティアとはわけが違うなと思った。1970年代まではセルビビエンダもボランティアだったそうだ。



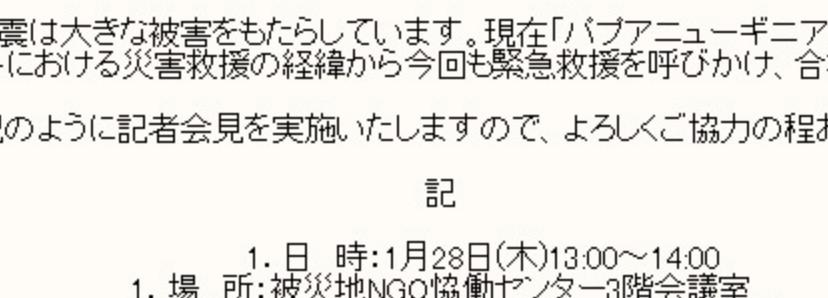
8月3日(火)

神戸からの支援金はセルビビエンダを通してABRAZAR(アブラザール)協会のプロジェクトに使ってもらうことになった。アブラザールはアルメニアのあるキンディオ州において障害者のケアをしているところである。1990年代初頭、歯科医師のJARAMILLO(ハラミヨ)が障害者のための歯科治療を行ったことから始まった。

アルメニア(い)る障害を持つ24歳以下の子どもたち2,900人を数える。そのうち地震の結果障害を持つようになった子どもたちは10%だという。障害者の施設もいくつか崩壊している。彼らは地域のいろいろな場所に小さな部屋を無料で借りながら活動を続けており、震災後も仮設住宅で歯科のプログラムを中心としたリーダーシップを取ってきた。

今回、地震にひとつのセンターをCALARCA(カラカル)に建てようとしている。アルメニアの隣町に「障害者のための芸術と健康センター」と題されているこの施設は運動系障害、知能障害、知能障害、てんかんなど上記の言葉に問題はないですか? サービスを他で受けることができない人の対象に健康管理と芸術の促進の観点からケアを試みるとい

う。その建設費用に神戸からの支援金をあてると言っただけだ。土地は確保されている。ランニングコストに関しては別で考えているようだ。



8月3日(火)

アブラザールの代表の人はなかなかいい人でした。彼が進めるプロジェクトを応援しようと思いました。

彼のお父さんはスパニッシュで話すので、お父さんとお話しするのに苦労しました。施設ができると良いスタジアムも利用できます。

ペルー日本円への換算があまり正確ではないみたいで、建物にかかる経費は70万円です。施設は建物を含めて350万円ほどです。芸術棟は300万円ほどだそうです。残りは管理棟の分ですね。

コーヒー 8月4日(水)

コロンビアといえはコーヒー。コーヒーは元々はアフリカのエチオピアが原産地だ。南米にはなかったのだがイエズス会の宣教師が持ち込んだのがきっかけだ。

アルメニアにあるPARQUE NACIONAL DEL CAFE(コーヒー)国立公園へ行った。見渡す限りのコーヒー栽培が広がっている。コーヒーの歴史と作り方を紹介されていた。畑を歩いて

1999年8月4日(水)

神戸からの支援金はセルビビエンダを通してABRAZAR(アブラザール)協会のプロジェクトに使ってもらうことになった。アブラザールはアルメニアのあるキンディオ州において障害者のケアをしているところである。1990年代初頭、歯科医師のJARAMILLO(ハラミヨ)が障害者のための歯科治療を行ったことから始まった。

アルメニア(い)る障害を持つ24歳以下の子どもたち2,900人を数える。そのうち地震の結果障害を持つようになった子どもたちは10%だという。障害者の施設もいくつか崩壊している。彼らは地域のいろいろな場所に小さな部屋を無料で借りながら活動を続けており、震災後も仮設住宅で歯科のプログラムを中心としたリーダーシップを取ってきた。

今回、地震にひとつのセンターをCALARCA(カラカル)に建てようとしている。アルメニアの隣町に「障害者のための芸術と健康センター」と題されているこの施設は運動系障害、知能障害、知能障害、てんかんなど上記の言葉に問題はないですか? サービスを他で受けることができない人の対象に健康管理と芸術の促進の観点からケアを試みるとい

う。その建設費用に神戸からの支援金をあてると言っただけだ。土地は確保されている。ランニングコストに関しては別で考えているようだ。

8月3日(火)

アブラザールの代表の人はなかなかいい人でした。彼が進めるプロジェクトを応援しようと思いました。

彼のお父さんはスパニッシュで話すので、お父さんとお話しするのに苦労しました。施設ができると良いスタジアムも利用できます。

ペルー日本円への換算があまり正確ではないみたいで、建物にかかる経費は70万円です。施設は建物を含めて350万円ほどです。芸術棟は300万円ほどだそうです。残りは管理棟の分ですね。

8月3日(火)

アブラザールの代表の人はなかなかいい人でした。彼が進めるプロジェクトを応援しようと思いました。

彼のお父さんはスパニッシュで話すので、お父さんとお話しするのに苦労しました。施設ができると良いスタジアムも利用できます。

ペルー日本円への換算があまり正確